

書誌第101号

本州南東岸水路誌

本州南岸 四国南岸
本州東岸 南方諸島

昭和24年6月刊行



海上保安庁水路部

本州南東岸水路誌

序

本誌には本州東岸及び南岸、四國南岸及び南方諸島の水路記事を記載する。

本誌は昭和9年7月刊行の本州沿岸水路誌第1巻を次の資料により改訂増補したものである。

1. 昭和18年4月刊行本州沿岸水路誌第1巻追補第7
2. 昭和23年水路告示第47号まで
3. 昭和23年11月までの当部で収集した各種資料

本誌の誤り又は改補資料はすみやかに当部へ通知せられるよう希望する。

本誌は調査員亀山盛一郎をして編修せしめた。

昭和24年6月

水路部長 須田院次

関係水路誌の沿革

1. 本邦沿岸に関するわが國最初的水路誌は寰瀛水路誌第1卷上下の2冊で明治18年に刊行した。
2. 明治25年3月寰瀛水路誌第1卷上下を日本水路誌と改称しこれを6巻に分ちその第1巻に日本沿海総記、東京海灣、本州東岸及び南方諸島、又第2巻上に本州南岸、四國南岸及び九州東岸の記事を記載する方針をたてた。
3. 明治25年3月日本水路誌第1巻刊行。
4. 明治27年7月日本水路誌第2巻上刊行。
5. 明治37年12月日本水路誌第1巻第1改版刊行。
6. 明治42年9月日本水路誌第2巻上第1改版刊行。
7. 大正3年1月日本水路誌第1巻第2改版刊行。
8. 大正5年12月日本水路誌を10巻に分ちその第1巻に日本沿海総記、本州南岸（東京海灣を含む）、四國南岸及び九州東岸、又第2巻に本州東岸及び南方諸島の記事を記載することに方針を改めた。
9. 大正7年3月上記改編に係る日本水路誌第1巻刊行。
10. 大正11年2月同じく日本水路誌第2巻刊行。
11. 大正14年12月第1巻及び第2巻を合集改編して日本水路誌第1巻（第3改版）を刊行した。
12. 昭和4年5月日本水路誌第1巻を本州沿岸水路誌第1巻（書誌第1号A）と改称した。
13. 昭和4年5月本州沿岸水路誌第1巻別冊として航路記を刊行した。
14. 昭和5年6月九州沿岸水路誌を改版したため本州沿岸水路誌第1巻中から第5編（九州東岸）を削除した。
15. 昭和9年7月本州沿岸水路誌第1巻改版刊行。
16. 昭和24年6月本州沿岸水路誌第1巻改版刊行と同時に本州南東岸水路誌（書誌第101号）と改称した。

記 載 例

1. 方位は主として真方位を用い真北を 0° として右回りに 360° に至る、又磁針方位を用いる場合には点又は度による。
2. 風、波はその進んで来る方位を、海流及び潮流はその流れ去る方位を示す。
3. 燈光の方位は海方から燈光に向かつてとる。
4. 四方点及び四間点の方位に「偏」の字を附してその方位の左右2点以内に当るものを示す。
5. 繁文を省くため何方位（何々）から何方位（何々）に至るを何方位（何々）—何方位（何々）、又何月至る何月を何月—何月というように至るを一で示す。

なお度量衡その他の単位は略記号を用いる。

例	マイル…………… M	ノット…………… kt
	ケーブル…………… cab	パーセント…………… %
	メートル…………… m	度…………… °
	キロメートル…………… km	分…………… ′
	トン…………… t	秒…………… ″

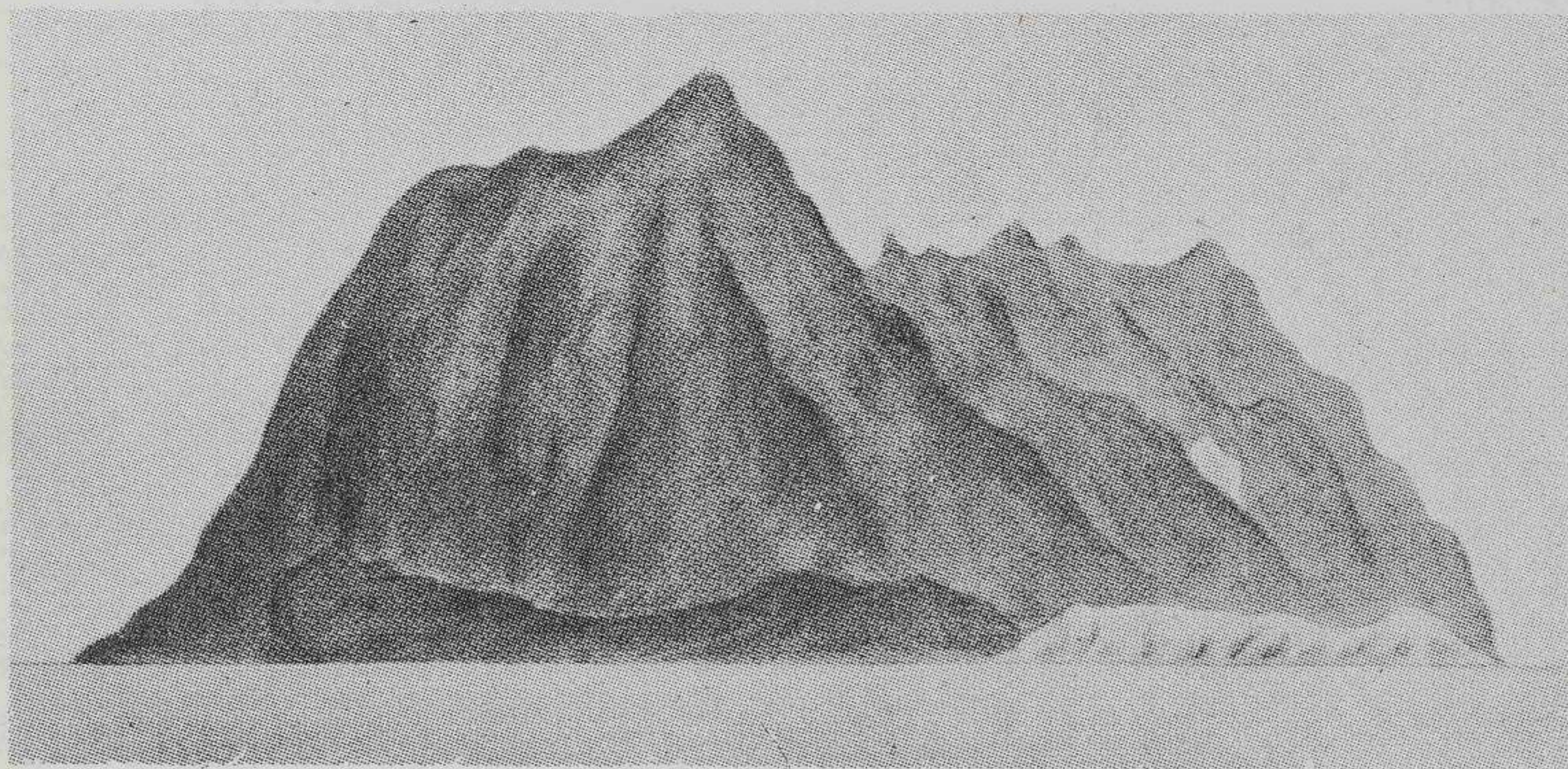
6. 河川又は海峡において左舷側、右舷側というのは河口、海口から水源に向かつて上航する船から見た左右をいい、又河川の左岸、右岸というのは水源から河口に向かつてその左右をいう。
7. 水深は基本水準面下のものをメートル (m) で示す。
8. 高さは平均水面上のものをメートル (m) で示す。
9. 距離は航海上のもの以外はメートル (m) 及びキロメートル (km) で示す。
10. 気圧はミリバール (mb) 及びミリメートル (mm)、降水量はミリメートル (mm)、積雪量はセンチメートル (cm)、湿度は百分率 (%)、温度は

攝氏の度(°C)で示す。

11. 風力は0から12までのビューフォート式、風速は毎秒メートル(m/s)で示す。
12. 地名に()を附したのには旧名称又は読み方を、[]を附したのには別名称を、{ }を附したのには説明に用いた地名であることを示す。
13. 片かなの地名は現代かなづかいによる。

第 48

北硫黄島
(南東方から望む)



313°

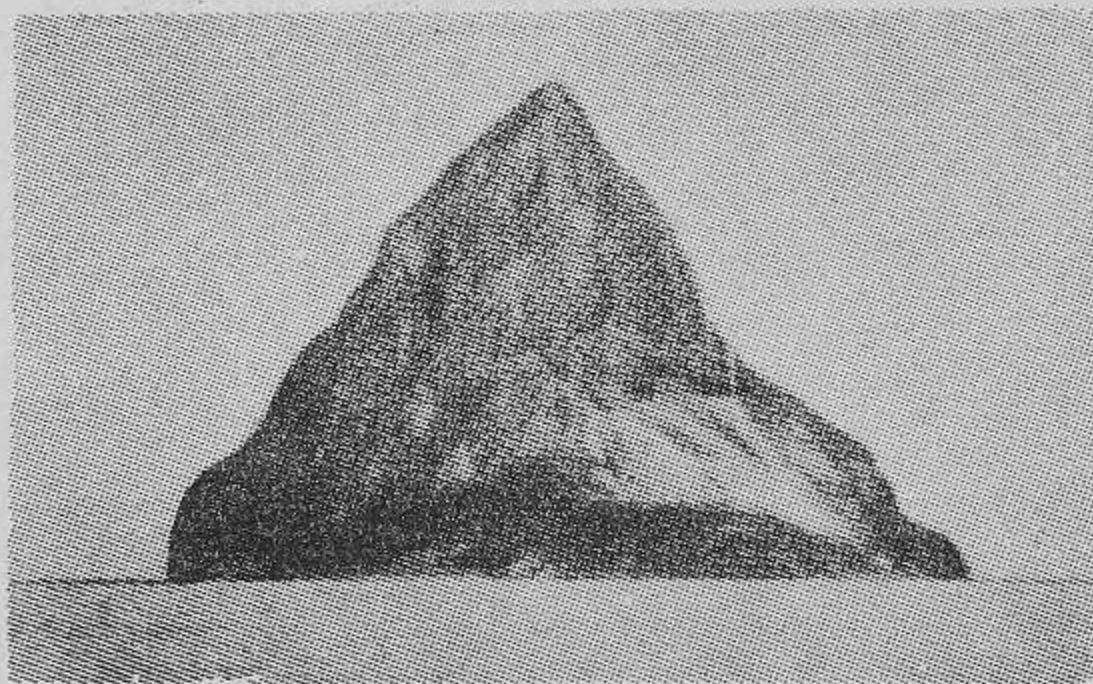
榊ヶ峰
321° 3.7 M

赤はげ

332°

第 49

南硫黄島
(南南西方から望む)



21° 10 M

て、盆状を呈する状況から見て旧噴火口に当り、西之島はその外輪山北西側の一部が海上に露出したものと思われる。

火山列島

北緯 $24^{\circ} 10'$ — $25^{\circ} 27'$ 、東経 $141^{\circ} 10'$ — $141^{\circ} 30'$ の間にあつて南北の方向に並ぶ 3 火山島から成り、一名**硫黄列島**ともいいその中央の硫黄島は母島の南南西方約 220 km にある。

列島は 1543 年 Bernard de Torres が発見したもので、その後有名な Captain Cook がハワイ群島で横死後、その乗艦 *Resolution* を指揮した Core が太平洋を探検したとき、1784 年ごろにこの列島を認め、Suipher Islands と命名した、又露國の有名な航海者 Krusenstern も 1805 年この列島を視認したとい
5、明治 20 年 11 月高崎東京府知事が初めて硫黄島を巡視して後、明治 24 年 9 月に政府はこの 3 島を北硫黄島、硫黄島及び南硫黄島と命名した。 10

列島は第 4 紀に属する新期の火山脈で周辺の海中には多くの海底硫氣孔があり硫氣を噴出している、島上でも又硫氣を噴出し特に硫黄島などは余燃がまだやまず地熱の高い所が少ない。

北硫黄島 (海図 50 分図) 火山列島中の最北島で小笠原群島ではこれをサンドル島といい険しい孤立の高い島である、島の最高頂**榊ヶ峰**の西頂は高さ 802 m で山脈は島の中央部を南北に走る、頂上は雑樹繁茂し中腹以下には耕地があるが島の北部は大体不毛の地である(第 326 ページ対面对景図第 48 参照)、周囲はほぼ楕円形で南西岸の一部を除くほか一帯に石浜で、いそ波が常に高く
舟艇の達着困難である。 20

北ノ岬 島の北端に当る石浜の岬で岬端に高さ 1.2 m の岩及びその他二、三の岩礁があり常に破浪する。

石野錨地 島の東岸中部に石野村落があり、その南方 550 m の岩礁のない所に上陸所がある、村落は海上からよく見える、船舶は村落の南東方約 750 m、上陸所の前面に錨地が得られる。

長根鼻 この島の最南端でその南西方約 1 km 附近の海面には上げ潮のと

き急潮を生ずる。

西村 西岸のやや北部にある村落で人家は海上から見える、この村に井水があり飲用することができる、この地から東方石野村落に至る坂道がある、村落の北方約450 m、岩礁のない所に上陸所がある、**鮪浅根**は西村の北北西方約700 mにある岩礁で礁上の水深は14 mである。

噴火浅根 北ノ岬の西方約4.5 kmにある火山質の岩礁及び砂地の浅水地で西北西、東南東の長さ約1 km、幅約550 m、礁上の水深14—18 m、周囲は深水でその附近の海水は黄色を呈し硫氣泡噴出しその臭氣は風下4 kmにも及ぶ、この浅根は強風、大波のとき破浪する、噴火浅根が泥土、灰、火炎を噴出したのは明治13年(1880年)で米艦 *Alert* が目撃したというが、その翌年は既に火炎の噴出はなかつたという。

潮流 上げ潮流は南東方から島の南東角を突き、その一部は島の東岸に沿って北上し、又他の一部は流速約1 ktで島の南側を西流する、北ノ岬附近で上記北流が西方から来る水流と合して東流となり流速1.8 ktとなるのを験測した、長根鼻の西方で高潮後1時に流速0.8 ktの北東流を験した、噴火浅根と島の間では上げ潮流は流向北北西、最強流速1.5 ktを、下げ潮流は流向南南東、最強流速1 ktを、又噴火浅根の東方では上げ潮流は流向西、流速1 ktを験した。

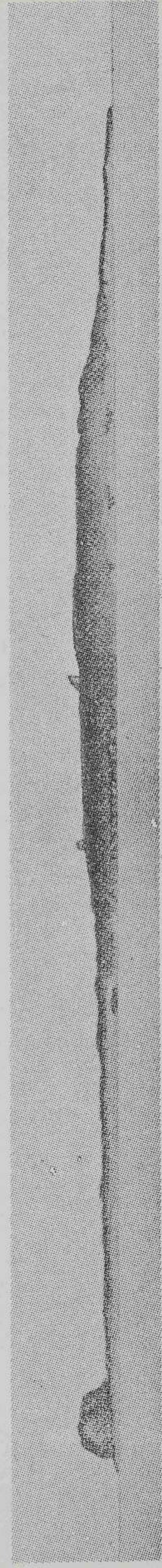
氣象 住民の言によれば春と夏は南西風、秋は北東風が多く1月—2月は西風が多い、4月—6月は雨が多く且つ霧のかかることがある、強風は8月—10月に多く、6月—7月は海上やや平穩である。

硫黄島 (海図50分図) 火山列島のほぼ中央にあり列島中の最大島でこの地方ではこの島を中硫黄島ということがある、南硫黄島及び北硫黄島は海中に突起しているが、この島のみは平らな台地状を成し北東から南西に長くその長さ約8.3 kmである(第323ページ 対面对景図第50参照)、全島地面がはなはだしく乾燥し谷川及び井水はない。

本島は年々隆起する傾向があり毎年約0.3 mに及び西岸は特に大である、島の北東部は岩層の段丘が重なり高さ約110 m、その頂部はでこぼこの広い荒野で

第 50

硫黄島
(南側から望む)



招鉢山
283° 2.3 M

二段岩
348° 2.6 M

目標となるものはない、北東部の中央を元山といい土地がやや低く、くぼんでいて硫氣孔があり島内中住民の最も多く居住する所である、元山の南方約 550 m にある二段岩は島の北東部における最高頂であるが顯著ではない、その南方にある南村附近には耕地が多いが海上からは見えない、南村東方の玉名山附近には低い雑草がはえている、島の北東側は概して荒土不毛の地で地中から水蒸気、硫氣あるいは黒煙を噴出する所が多く、その噴出は間断があつて海上から見えることがあるが明らかでなく、ぼんやりしている、北東岸は岩のがけが多く所々群石海岸、砂浜があり硫氣を噴出する所が多く、時々土砂、灰を噴出しその高さ約 6 m に及ぶことがある。

島の南西部は千鳥ヶ原という火山砂の地峽部と島の南西端である摺鉢山とから成る、千鳥ヶ原の東西両岸は共に砂浜で東岸はいそ波が高く、船舟の避泊及び着岸に適する所がない、摺鉢山は俗称パイプといい、すりばち形の休火山で高さ 169 m である。

10

北ノ鼻 島の北端を成す岩角である、鼻の東方約 330 m に離岩があり高さ 10 m で東、西から見るときは顯著である、この岩の西方約 550 m に硫黄を噴出する所があり海面にあわを生ずる、この鼻の東南東方約 1.8 km, 距岸約 500 m に高さ 4.6 m の離岩がありその南側に近く海底に硫氣孔がある。

これら離岩の南方約 550 m に 2 個の破浪岩がある、この破浪岩から南方立岩鼻までの海岸附近には海底に硫氣孔が特に多く、その附近の海水は非常に濁つていて硫氣臭が強い。

20

立岩鼻 (タチイワ) 北ノ鼻の南東方約 3.4 km にある高いがけで、その南北両側に砂浜があり硫黄島北東岸中最も顯著な岬である、鼻の前面に高さ 16 m の突岩及び破浪岩がある。

東岩 立岩鼻の 102° 約 3.7 km にある低い群岩で高さ 5.1 m, 周囲の水深は不同で、その北西方約 450 m に水深 3.3 m の礁、又 750 m に水深 8.4 m の礁がある。

南錨地 南村の沖合で摺鉢山と東岩の一線上、水深 12 m 附近に錨地が得

られ、この地は底質どろ混じりの細砂で錨かき良好である、二段岩は投錨目標としては適当でなく、又南村前浜に上陸所があるがうねり（特に偏南）があるときは無風でも上陸至難である。

航空燈台 摺鉢山から 42° 約 5 km に航空燈台があり、そのグレアは晴天の暗夜 40—50 M から見える。

ビーチング 東海岸では摺鉢山の 56° 約 3.2 km 附近（海浜は急深であり沖合 100 m で水深 8—10 m となる）、西海岸では摺鉢山の 10° 2.0 km 附近（海浜の水深 1—2 m, 沖合 100 m で約 5 m である）にビーチング・ベースがあるが両岸共に砂底で錨かきは良くない。

10 **ニツ根** 千鳥ヶ原南東岸の南西部で摺鉢山頂の北東方約 1.7 km にある岩島で高さ 1.5 m, その北方海岸にも 1 岩がある、この岩の東北東方約 1.4 km 及び約 1.9 km の海底に硫氣孔がある。

飛石鼻 摺鉢山南西のふもとにある群石海岸で硫黄島の南西端を成し鼻端に岩石が多い、鼻端から北北西方約 750 m に高さ 4.8 m の離岩がある。

千鳥ヶ原北西方錨地 千鳥ヶ原西岸沖合で釜岩の南南東方 750—900 m の附近に錨地があるが、底質粗砂急深であり、風力 5 以上となるときは走錨の虞がある、上陸所は西村の南方約 1.7 km 附近にあり海岸は遠浅ではしけの発着には好都合であるが上陸の能否は風とうねりの状況による。

20 **釜岩** 上記錨地の北北西方にある群岩で南北の長さ約 650 m, 最高岩は高さ 12 m で中央部からやや南方にある。

監獄岩 釜岩の北方に更に 1 群岩があり監獄岩といい、南北の長さ約 1 km で最高岩は北端に近く高さ 8.2 m である、この岩の西方約 650 m に 3 個の破浪岩があり南北に並ぶ。

平岩埼 硫黄島北西岸において千鳥ヶ原砂浜の北端を成す岩角で、埼端にある礁脈は常に破浪する、埼の附近に基本水準標及び経緯度測点標がある、この埼の南西方約 830 m に温泉のわき出る所がある、偏南東の風やうねりが強いとき汽船は平岩埼の西北西方約 550 m 附近に避泊地を得られるが適当な上陸

所は得難い、平岩埼の南東側に上陸所があつたが近年附近の海底が隆起したため高潮時に小舟でも上陸できなくなつた。

潮流 北ノ鼻の北側においては下げ潮流は東流し流速 1.5 kt, 飛石鼻の南西側では下げ潮流は北西方に流れ流速 0.8 kt, 監獄岩の北西側では上げ潮流は西方に流れ流速 2.5 kt, 釜岩の西側では上げ潮流は南西に流れ流速 1.3 kt である。

南硫黄島 火山列島の最南島でその形きり状を呈し島頂はやや南北に長く周囲の険しい不毛の孤立峰で高さ 970 m, 小樹が疎生している (第 325 ページ対面对景図第 49 参照)、島の上部は雲霧に隠れることが多く北側の山腹に硫氣孔がある、島岸はがけ又は石浜で岩礁が散在する、島内には淡水なく住民もいない。

10

三星岩 (ミツホシ) 島の北西角の北西方約 430 m にあり、3 頂を有する灰白色の岩石で高さ 9.3 m である。

松江岬 島の北東角でその前面に破浪岩がある、この岬から北東方 1.1 km の間は水深 50 m 以下で海中から硫氣が噴出し附近の海面は著しく混濁して黄茶色を呈し 2 M 内外の距離から認めることができる。

警戒 松江岬の 21° 約 4.4 km に最小水深 18 m の礁がある、南北約 450 m に及び周囲は急深である、この礁の南方 900 m の所では水深 280 m で附近の水色は淡薄となる、この礁の位置には明治 37 年に島ができたが 130 余日を経て消失し、次いで大正 3 年 1 月同所に島ができたが大正 4 年 9 月には水面下に没した、附近航海者は注意を要する。

20

赤岩鼻 島の南西角でかば色のがけである。

無名浅堆

小笠原群島父島の西方約 650 km, 北緯 $26^\circ 12.3'$, 東経 $135^\circ 46'$ に最小水深 270 m の浅堆がある。

沖ノ鳥島

沖ノ鳥島は南硫黄島の南西方約 680 km の北緯 $20^\circ 25'$, 東経 $136^\circ 05'$ の洋上に

孤立する岩礁で、外國人はこれを Douglass Reef (Parece Vela) という。東西約 4.6 km の狭小な環礁でその西部にある 2 個の水上岩のほかすべて水中に没し干出岩が点在する、この 2 個の水上岩は約 370 m を隔てて南北に相對し北岩は高さ 2.8 m, 南岩は 2.2 m で、この南岩の位置は北緯 $20^{\circ} 24' 24''$, 東經 $136^{\circ} 03' 49''$ で両岩共に遠望顯著である、環礁の周囲は急深で離險はない。

南 鳥 島 (海図 48 分図)

父島から 105° 約 1,200 km, 北緯 $24^{\circ} 17' 30''$, 東經 $153^{\circ} 58' 0''$ にある孤島で明治 31 年 7 月先占権によりわが版図に編入された、この島はほぼ正三角形の平低な小島で最高部は高さ約 19 m に過ぎないが、某船は晴天の日眼高 11.6 m で距離約 13 M からこの島を認めたという、全島樹木が繁茂し海岸は白色の砂礫から成り、その周囲には水深 0.6—1.5 m, 幅 200 m 以下のさんご裾礁がある、昔某会社の経営で鳥ふん採取及びやし of 栽培等が行われたが地味は鳥ふんのため肥え、又島内に掘り井戸があるが塩分があつて飲料にはならないという、この島は距岸約 2 km で水深 200 m 以上となり、船舶の錨地となる所がなく風向に従つて風下の沖合に漂泊するほかはない。

黒井埼 島の北角でその北北東方約 900 m までさんご礁が突出し破浪するので小舟も近寄れない。

坂本埼 島の東角で激しく破浪し、南東方約 900 m の間は海水が変色している。

20 **笠置埼** 島の西角で埼端に破浪があり、南西方約 1.8 km まで海水が変色している。

上陸所 東岸黒井埼の南方 270 m の所と南岸村落前面の浜との 2 箇所あるが共に礁の割れ目であり、小舟のほか着岸できない。

氣象 風向は一定しないが冬季は北東風、夏季は東—南の風が多く風力 5 以上になることは少い、なお数年ごとに 10 月ごろ 1 回暴風の被害がある、温度は冬季 18.3° を下ることはなく夏季は 32° 内外で時に 37.8° に達することがある、氣圧は通例 1,016 mb 内外で大体一定している、降雨はきわめて少く夏季

は時々スコールがあるがすぐ晴れる、7月は最も雨が多く、9月、10月のころには薄い霧がかかることがある。

海潮流 南鳥島附近の海潮流は常に東方に向かいその流速は1 kt 内外である。

疑 存 礁

Los Jardines Islands 1788年英船船長 Marshall の報告によれば北緯 $21^{\circ} 40'$ 、東経 $151^{\circ} 35'$ の所に2小島があるといい、又これより前1529年に同位置附近に Alvaro de Saavedra は小島を発見し Los Jardines Islands と名づけたというが、いずれも風説でその存在は疑わしく、大正15年軍艦満州はこれを搜索したが図載位置附近37 km 以内には島礁はなかつた。

10

捕鯨者の言によれば上記 Los Jardines Islands の図載位置の南東方約185 km、北緯 $20^{\circ} 30'$ 、東経 $153^{\circ} 0'$ の所に礁があつたというが、大正15年軍艦満州が探測したが図載位置の附近28 km 以内には礁脈はなかつた。